

鷹の目の狩人

IV

八重の桜と会津城下町屏風の発見

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

当 文庫の所在地である安中市はかつて安中藩があり、新島八重の夫で同志社の創始者、新島 襄が安中藩士であったことから、NHKの報道後、にわかに熱を帯びている。実は昨年6月、会津若松城下屏風六曲一双を入手、長野の展示会で取り紛れ、そのままにしていた。そこで詳細に屏風の調査を実施したところ、屏風は会津藩絵師の大須賀清光によって嘉永4年(1851年)に描かれたものと判明した。この年、八重6歳であり、大河ドラマ『八重の桜』のスタートに近い年代であり、あの過酷な戊辰会津戦争を遡る17年前の、焼失してしまう前の会津若松城下町が詳細に、美しく描かれていた。オークションにて入手したので出自は不明であるが、何れ、会津から持ち出されたものと推定される。

屏 風は会津城下町を西から見て、右隻に南方向、東山温泉、官軍が砲撃陣地とした会津城天守から1.5kmの小田山が描かれ、左隻に北方向、飯盛山、さざえ堂、遠景に磐梯山が描かれている。各種地形図と検証の結果、書かれている五百近い文字情報から、東西4km、南北6.5kmを描いていた。会津若松城内を中心に、郭内の武家屋敷、郭外の城下町、町屋、寺院等が細密に描かれている。会津若松城下屏風は数点残存しているが、いずれも一隻屏風か、一双であっても片側だけ、城下屏風というものであり、一双とも城下町を描くものは新発見であった。もっとも、この屏風が六曲一双である必要については疑問がある、左右二扇、合計四扇は郊外を描いており、城下町屏風としては、中心の八扇のみで足り、他の屏風のように八曲一隻でも、デザイン的には可能と思うのである。縦94cm、横十二扇で540cmは、後の大正広重吉田初三郎等の描く鳥瞰図の構図を連想させる、あるいは、それらの嚆矢であるかもしれない。当時、山本八重が住まいした米代四之丁も描かれ、近所には砲術練習場である角場もある。藩施設として、五層の天守、今の阿弥陀寺に移設され現存する本丸の御三階、城内11基の二層櫓、聖堂日新館、御菜園、学館、代官所、本陣、角場、藩士屋敷100名以上、寺院120、町村名等200、名所旧跡等が描かれている。八重の桜放映に際し、屏風が発見されたことも、文庫の所在地が安中であることも何かの縁と考え、屏風を『富原文庫本会津若松城下屏風展』

として、来る4月27日～9月2日まで、安中市学習館ふるさと学習の森にて公開することとなった。この発見を会津魂、会津の心、ハンサムウーマン新島八重に。

会 津若松城屏風公開に際し、会津若松城と戊辰戦争の資料展示、城郭絵図、各年次の明治から戦前の市街地図数10枚を展示することとした。廃城後の市街の変遷を見ていただけることとなる。残念なことに文庫の基本蔵書である、正保城絵図を凌ぐ日本最大の城郭調査、明治政府陸軍省築造局による明治5年城郭存廃調査絵図128図に会津若松は含まれていない、これは調査当時すでに軍営となり、調査の必要がなかったためである。戊辰戦争の絵図では長岡城、平城、白河城、五稜郭や、各種錦絵の展示を計画している。

一 の企画展で最大の発見は明治35年福島県北会津郡土性図である、農商務省地質調査所が作成した1万分1地質図であるが、屏風検証のため、この地域の地形図の嚆矢として膨大な量の地形図の中から、正式2万分1地形図を探したが、会津は作成されていない。検証に用いたのは明治43年の2.5万分1地形図であった。屏風の描画地域が確定でき、感激していたところ、大量の軸装地図の中に、農商務省の地形図を発見したのである。明治初期の軍部作成の迅速地図で会津があるかは確認できていないが、これが会津の大縮尺地図の嚆矢となる。そこには、荒廃した郭内武家屋敷と繁栄の基礎となった城下町が描かれる。



CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH